

## 留学生を案内する日本の本当の名所とその歴史 第 3 回

### <九州編>

留学生に「日本」の成り立ちを知ってもらうときに、最も重要なのは「日本人はどこから来たのか」ということではないでしょうか。もちろん生物学的、あるいは遺伝子学的に言えば、さまざまな説があります。そのような意見を望む理数系や化学を目指した人もいるかもしれません。しかし、ここではそのような方とは少し違って、「神話的」なアプローチを試してみようと思います。

神話というのは、科学的な根拠はありませんが、一方で、自然現象や、昔の人の鋭敏な感覚によって成り立っています。

日本の神話、これは古事記と日本書紀を示しますが、その神話の中において、「天孫降臨」ということが書いてあります。そのアプローチから、九州の名所をご案内しましょう。

#### 1.初級編

今回は九州全土ということで少々広がっています。しかし、それだけに様々なところに行けるし、その中の一つでも行くことができるのではないのでしょうか。初級編として紹介したいのは、誰でも知っていますが「高千穂峡」です。

古事記の記載をもとに書きますと、天照大御神（あまてらすおおみかみ）と高産巢日神（たかみむすびのかみ）は、天照大御神の子である正勝吾勝勝速日天

忍穂耳命（まさかつあかつかはやひあめのおしほみのみこと）に、「葦原中国（あしはらのなかつくに）平定が終わったので、以前に委任した通りに、天降って葦原中国を治めなさい」と言います。しかし天忍穂耳命は、「天降りの準備をしている間に、子の子番能邇邇藝命（ひこほのくににぎのみこと）が生まれたので、この子を降すべきでしょう」と答えたので、邇邇藝命（くににぎのみこと）、要するに「天照大御神の孫」が下りてくることになります。

天照大御神は孫の邇邇藝命に「この鏡を私（天照大御神）の御魂と思って、私を拝むように敬い祀りなさい。思金神（おもいかねのかみ）は、祭祀を取り扱い神宮の政務を行いなさい」八咫鏡（やたのかがみ）、八咫鏡（やたのかがみ）、天叢雲劍（あめのむらくものつるぎ）の三種の神器を持ち、思金神、手力男神（あめのたちからをのかみ）、天石門別神（あまのいわとわけのかみ）を副（そ）え、邇邇藝命が日本に降りてきます。

その邇邇藝命が高天原から降りてきた土地が、諸説ありますが、その一つが日向国（ひゅうがのくに）高千穂町といわれています。

高千穂町には、天岩戸神社と「天岩戸」と言われる洞窟が今もあります。

天岩戸そのものは崖の上であり、中に入ることはできません。しかし、その岩窟をご神体として民間信仰的に天岩戸神社ができています。天岩戸は、天照大御神が素戔鳴尊（すさのをのみこと）と問題が生じたときに隠れてしまった岩窟です。いわゆる「岩戸隠れ」の神話です。素戔鳴尊に世の中を照らす天照大御神が隠れてしまうと、世の中は禍々しいことが起こります。神々は困ってしまい、天の安河の川原に集まり、対応を相談します。この「天の安河の川原」も、天岩戸神社の中にあります。相談の結果、思金神の案によって天照大御神に戻ってきてもらうことに成功します。

天照大御神は、その時に八咫鏡（やたのかがみ）に映った自分の姿を見て、最

も尊い神が来たと言われ、勘違いして出てくるのです。

邇邇藝命は、高天原を離れ、天の浮橋から浮島に立ち、筑紫の日向の高千穂に降り立ったとされています。邇邇藝命は「この地は韓国（からくに）に向かい、笠沙の岬まで真の道が通じていて、朝日のよく射す国、夕日のよく照る国である。それで、ここはとても良い土地である」と言って、その降り立った地に宮殿を作りそこに住むようになります。現在の天岩戸神社は、その邇邇藝命の宮殿とも言われていますし、また、邇邇藝命が天照大御神を懐かしく思い、また天照大御神の天岩戸の岩隠れを憐んで、ここに神社を祀ったとも言われています。

地元の人々に古くから慕われた神社でしたが、民間の信仰であったために荒廃が進んでいました。そのような中、宝永4年（1707年）に荒廃した社地を整地し、文政4年（1821年）には延岡藩主の援助で社殿を再建したと伝えられています。現在では西本宮と東本宮二つの神社を総称して「天岩戸神社」と言っております。西本宮には、天照大御神と天岩戸をご神体としています。ただ、こちらは「天照大御神」ではなく「大日靈尊（おおひるめのみこと）」という別名を使っています。あくまでも西本宮は天岩戸を中心に行っているということではないでしょうか。天照大御神がこもっていたということから、天岩戸には、天照大御神を超える力があるとされていますし、また、そこから「日の出のように」天照大御神が出てきて中葦原を照らすことによって、禍々しいことがなくなったということから、天岩戸は、「幸運が出てくる」というような効果があるとされています。もちろん、そのようなことがなくても、信仰の対象になっていたものと思われまます。

一方、西本宮から10分くらい離れた東本宮は天照大御神が祀られています。また、以前の伊邪那岐尊と伊邪那美尊も祀られていたとされています。昔は西本宮と東本宮双方ともに独立した神社であったといわれていますが、同じ御祭神

であることなどから「天岩戸神社」として一緒になっています。

天岩戸に関しては、南北朝時代の南朝の天皇である長慶天皇が、自分も天照大御神のように世の中を照らす政治を行いたいという願いを込めて和歌を詠んでいます。後村上天皇の長男ですでに北畠親房や四條隆俊を失ってしまい、徐々に影響力が少なくなった南朝にあつて、自らの境遇を「天岩戸の中に籠ってしまった天照大御神」になぞらえて、詠んだ歌です。

久方の 天岩戸を いでし日は 変わらぬ影に 世を照らすらん

新葉集 長慶天皇

留学生の皆さんも、現在は苦しい思いをしながら、故郷を離れて頑張っています。ちょうど、岩窟の中に籠った天照大御神と留学生の皆さんは同じ境遇かもしれません。国に帰ってあるいは日本に残っての活躍を期して、ぜひ「天岩戸神社」に行ってみるのはいかがでしょうか。

## 2.上級編

九州における上級編は、一か所ではありません。九州は、何しろ一番初めに神様が日本に降りてきた土地ですから、現在の天皇の先祖に関することで様々に謂（いわ）れのある場所が点在しているのです。

ところで、神社には「社格」という階級があるのはご存じでしょうか。神社の社格は、その神社の祀っている神やその場所にその神が祀られている由縁などによって変化します。古代の日本では日本全体を司る神を祀っている「天津神」とその地域の生活を中心にした現象を司る神を祀っている「国津神」との二つに

分かれていました。

これが平安時代になると、平安時代にまとめた伝統などのことをまとめた書物に「延喜式」という本があります。その延喜式の9巻と10巻にまとめられている神社のこと、要するに延喜式の編者に「日本の正当な神社」と認められたもの、これを「式内社」と言います。一方、ここに書かれていない神社は「式外社（しきげしゃ）」というようになります。ちなみに式内社は日本全国で2,861社、鎮座されている神は3,132座あります。式内社のうち、平安京の神祇官から幣帛（へいはく）を受けるものを「官幣社」、各国の国土から受ける神社を「国幣社」と言います。

この「官幣社」は明治時代に整理されます。神社の格は、大きく「官社」と「諸社」に分類され、官社に97社が選ばれます。官社は、「官幣社（神祇官が祀る神社で、官幣大社、官幣中社、官幣小社に分けられる）」と「国幣社（地方官が祀る神社で、国幣大社、国幣中社、国幣小社に分けられる）」に分類され、いずれも神祇官（明治時代の神祇官）の所管とされたのです。また後に、官幣社にも国幣社にも分類できない官社が出てきます。これは「国家に功績を挙げた人物を祀る神社」などがそれに当たります。これは、神話に出てくる神ではなく、人間が主祭神となるので、通常的神社と区別されていました。このようなところを「別格官幣社」として祀るようになります。ちなみに、別格官幣社の第一号は明治5年に制定された、建武の新政の時に後醍醐天皇について大きな働きをした楠木正成を祀る「湊川神社」です。

ここに紹介したもの以外に、もう一つ神社を区別する表記があります。それが「神宮」「大社」「神社」の区別です。

神社には通常的神社と、延喜式神名帳に大社として列格される492の神社の中で、特に、天照大御神の系列ではないものの、神武天皇が即位するまでの間に、

現在の国を作ることに非常に大きな影響を与えた神々に対して「大社」と名前を付けるようになっていきます。大国主命を祀る出雲大社や藤原氏の祖先である天児屋命（あめのこやねのみこと）を祀る春日大社などが有名です。

これとは別に、「神宮」という名称があります。正式には「伊勢神宮」だけが「神宮」というものです。これは、天孫降臨の時に、天照大御神が特別に邇邇藝命に渡した「八咫鏡」と「思金神」が祀られているため、現在でも「天照大御神の宮」であるとされているからです。

しかし、現在ではもう少し広くとって「現在は皇室に関わりの深い神を祀る、規模の大きな神社に神宮の社号がつけられている」と解釈されています。

さて、少々前置きが長くなりましたが、現在の皇室に関わりがある神社である「神宮」が、九州には6社も存在します。鵜戸（うど）神宮・宮崎神宮・霧島神宮・鹿児島神宮・宇佐神宮そして英彦山神宮の6社です。このうち英彦山神宮が明治時代の分類で官幣中社、残りの5社が官幣大社になります。

6社もあるので簡単にすべての内容を見てゆきたいと思います。

まず「宮崎神宮」です。宮崎県宮崎市にあります。宮崎県というのはなかなか良いネーミングで、昔は「天照大御神から言われた邇邇藝命が降りてきた場所」ということで「日に向かう国」として「日向国」と言っていましたが、新しくなり、ここを「宮ノ崎」として県名にしています。というのも、ここ宮崎神宮こそ、神武天皇が東征を行う前まで都としてここに住んでいた「宮殿」があった場所です。後に九州に下向してきた皇孫の建磐龍命（たていわたつのみこと）がその縁に因んでこの場所に創祀したといい、崇神天皇の時代に社殿が創建され、応神天皇の時代からは『国造本紀』に載せる日向国造の祖、老男命（おいおのみこと）が祀るようになったと伝えられています。

鵜戸神宮は、宮崎県日南市にあります。この神社はかなり変わってしまして、

日向灘に面した断崖の岩窟の中に本殿があるというつくりになっています。そのために、参拝するには崖にそって作られた石段を降りる必要があります。また、通常は、神社の参拝というのは、「山の上に登る」のですが、この神社は海の中に入ってゆくように「階段を下って」参拝するような形になります。

ここは、邇邇藝命の子供である火遠理命（ほおりのみこと）と結婚した豊玉姫が、天津日高日子波限建鵜草葺不合命（あまつひこひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと）を産むために産屋を立てた場所とされています。豊玉姫はなぜこのようなところに産屋を立てたのでしょうか。これは、豊玉姫の結婚相手の物語を知っていればなんとなくわかります。結婚相手は火遠理命といますが、別名を「山幸彦」と言います。山幸彦と海幸彦の童話は知っている人も少なくないかもしれません。ある日海幸彦の釣竿を借りて釣りをしていた山幸彦は、魚に針を持って行かれてしまいます。困った山幸彦は、海に潜って探していると、海の神である綿津見神に招かれそして助けてもらいます。綿津見神の娘である豊玉姫と結婚することになるのです。

山幸彦の物語は、もう少し詳しく調べていただければよいのですが、豊玉姫はどのように「海の神の子供」です。そのために産屋を海に近いところに作ったのです。

そして、ここで生まれ、個々の主祭神となった天津日高日子波限建鵜草葺不合命の子供が「神武天皇」ということになるのです。まさに、この鵜戸神宮は、神武天皇の父の生まれた場所なのです。

なお、ここには、豊玉姫が海から結婚して上がってくる時に乗ってきた亀がそのまま石になったと伝えられる「亀石」や釘を一切用いない橋板 36 枚からなる反橋で、金剛界 37 尊を現す（36 枚の橋板が 36 尊を、橋を渡る本人が 1 尊を現す）とされる玉橋または「神橋」とも呼ばれる橋もあります。これらも一見の

価値がある場所です。

霧島神宮は、高千穂峰で、やはり邇邇藝命が天孫降臨で降りてきた場所として言われています。実際は高千穂町の天岩戸神社なのか、霧島神宮に降りてきたのか、まだ意見が分かれています。もちろん、霧島神宮の主祭神は邇邇藝命です。

現在の霧島神宮は正徳5年（1715年）に薩摩藩主島津吉貴の寄進で建てられたもので、社殿はいずれも朱塗り、本殿は内部も豪華に装飾され、柱、梁、長押などはすべて朱漆塗りとした上に要所を彩色文様や鍍金（とぎん）の飾り金具で装飾し、壁には極彩色の浮き彫りを施した羽目板を配するなど、贅をこらしているつくりになっています。神社でこのように内部まで贅を凝らしたつくりであるのは非常に珍しいです。伊勢神宮などでも、何年かに一度遷宮をするのであまり贅を凝らしたつくりにはなっていません。その中でこの霧島神宮は「天孫降臨のあった場所」として特別に作られたように見えます。

鹿児島神宮は、鹿児島県霧島市隼人町内にあります。ここは天津日高彦穗々出見尊、そう「山幸彦」と豊玉姫が主祭神になっています。社伝によれば、「神武天皇の時に天津日高彦穗穗出見尊（あまつひこひこほほでみのみこと）の宮殿であった高千穂宮を神社としたもの」とされますが、実際のところはどうかでしょうか。この神宮の近くに、天津日高彦穗々出見尊の御陵とされる高屋山陵がありますから、そのようなこともあるのかもしれませんが。

もう一つ、この神宮には言い伝えが残っています。『八幡愚童訓（はちまんぐどうくん）』に、「震旦国（インドから見た中国）の大王の娘の大比留女は七歳の時に朝日の光が胸を突き、懐妊して王子を生んだ。王臣達はこれを怪しんで空船に乗せて、船の着いた所を所領としたまうようにと大海に浮かべた。船はやがて日本国鎮西大隅の磯に着き、その太子を八幡と名付けたと言う。継体天皇の代のことであると言う」との記載があります。平安時代の説話集である『今昔物語集』

には、「八幡神は、大隅の国に出でて次に宇佐に遷（うつ）り、ついに石清水に跡を垂れた」とあります。

南方から物がたどり着くときに、この大隅国や種子島によく届きます。1543年に鉄砲が日本に伝来するのも、種子島でこの辺になります。ちょうど海流の都合で九州南部に南の島からさまざまな物が流れ着くようになっているようです。その中の一つに「八幡神」に関わることがあったのかもしれませんが。その意味において、「日本に新たなものがたどり着く場所」として「神宮」となっていたのかもしれませんが。

宇佐神宮は、大分県宇佐市にあります。全国に約44,000社ある八幡宮の総本社で、石清水八幡宮・管崎宮（はこぎきぐう）（または鶴岡八幡宮）とともに日本三大八幡宮の一つです。本殿は小高い丘陵の小椋山（亀山）山頂に鎮座する上宮とその山麓に鎮座する下宮とからなり、その周りに社殿が広がっています。

主祭神は「八幡大神」となっていますが、別名「誉田別尊（ほむたわけのみこと）（応神天皇）」となっています。日本では応神天皇が八幡神と同一視されています。日本の天皇の中で「神」と諱（いみな）がつくのは「神武天皇」「応神天皇」「崇神天皇」の三代しかありません。その中の一つ「応神天皇」が祀られているのが宇佐神宮ということになります。そのこともあってか『承久記』には「日本国の帝位は伊勢天照太神・八幡大菩薩の御計ひ」と記されており、天照皇大神に次ぐ皇室の守護神とされていました。後に、応神天皇が三韓征伐を行った神宮皇后の子供で神宮皇后が三韓征伐を行っていた時にすでに胎内において「胎中天皇」といわれていたことなどもあり、武士の神様とされるようになります。そして天皇家から出た武家の棟梁である「源氏」の氏神となるのです。

「八幡造」といわれ、2棟の切妻造平入の建物が前後につながった形をとる本殿と孔雀文磬（くじゃくもんけい）が国宝で、そのほかにもたくさんの重要文化

財などが残されています。

福岡県田川郡添田町の英彦山にある英彦山神宮です。ここだけが「官幣中社」になっています。

主祭神は正勝吾勝勝速日天忍穗耳命です。この神は天照と素戔嗚の誓約の際、素戔嗚が天照の勾玉を譲り受けて生まれた五皇子の長男で、勾玉の神とされています。そして天孫降臨の邇邇藝命の父に当たります。しかし、なぜ「天照大御神と邇邇藝命の間の代が官幣中社」なのでしょう。それは、葦原中国平定の際、天降って日本を治めるよう天照大御神から命令されるのですが、下界は物騒だとして途中で引き返してしまうのです。そこで「物騒でなければ行くのか」と思い、建御雷之男神（たけみかづちのかみ）らによって大国主から国譲りが行われます。すでに国を譲られたのですから、もう物騒なことはないはず。そこで天照大御神は再度正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に降臨するように言います。しかし、天忍穗耳尊は国譲りをしていた間に生まれた息子の邇邇藝命に行かせるようにと進言し自分は行かないのです。その結果邇邇藝命が天下ることとなったのです。

本来ならば、「日本を治める神」であったはずですし、また天孫降臨の邇邇藝命の父です。しかし、皇室とは直接というよりも、この日本の統治とは直接関係がないというのが本当のところのようです。

この地に神宮ができたのは、継体天皇 25 年（531 年）、北魏の僧・善正が英彦山山中で修行中に獵師・藤原恒雄に会い、殺生の罪を説いたのです。しかしそれでも恒雄は獵を続け、1 頭の白鹿を射ました。その時、どこからともなく 3 羽の鷹が出現して白鹿に檜の葉に浸した水を与えると、白鹿は生き返ってそのまま逃げてしまったのです。それを見た恒雄は、この白鹿は神の化身なのだと悟り、善正の弟子となって当社を建立したという。そんな伝説が残っています。

現在の神宮の建物は、江戸時代に細川忠興が再建したもので重要文化財になっています。

さて、駆け足で見てきましたが、これらの「神宮」を回ると、神武天皇までの日本の「成り立ち」がわかるのではないのでしょうか。

留学生の皆さんに、ぜひ「日本の成り立ち」を、これらの伝説や神話とともに話してあげながら、ゆっくりと、古代の神々がどうしてこの地に「降りてきた」のかを考えてみるのもよいかもしれません。